

飛鳥ちゃんが厨二系オ  
り主とぐだぐだ話すお  
話

hotice

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

なんか中二病に染まって来たオリ主と飛鳥ちゃんのぐだぐだした日常のお話になると思います。

7 話  
6 話  
5 話  
4 話  
3 話  
2 話  
1 話

--	--	--	--	--	--	--

44 37 29 22 15 7 1

目次



## 1話

僕、二宮飛鳥は中二病である。

よくある思春期がまねいた恥ずかしいかつこつけの一種だが、でもやはりそこには自覚してもなお止められない浪漫があるのだ。

だから僕は奇異の目に晒されようと、中二病であることを隠すつもりはない。

その結果として学校でもそういうキャラで通っているわけだが・・・。

そんな僕だが、最近学校で僕の中二病センサーに引つ掛かる奴がいるんだ。絶対に間違いない、あいつも僕と同じ中二病患者であるってね。

どうやら隠そうとしているようだが、僕の目はごまかせないぞ。

そいつが気になつた初めのきつかけは、確か教室で隣の席になつた時だったか。

何やら古臭い本を読んでいるのが気になつて表紙を見てみた所「リア王」であつたのだ。一応名前だけならば誰でも知っているであろうウィリアム・シェイクスピアの作品だ。

けどただの中学生が読むにしては中々に渋いチョイスだったので、少しばかり興味が引かれたのだ。

そいつが普段、あまり本を読まない、どちらかというところラスカースト上位の人間であつた事も要因の一つではある。

だからこそ、少しばかり声をかけてみたのだ。

「シェイクスピアとは珍しい物を読んでいるね。そういう本を読むタイプとは思つていなかったんだけど。案外好きなのかい？」ってね。

そしたら、そいつは困つた顔をして頭を掻き始めたのだ。

「いや、まあそんなに好きじゃないんだけど……まあ色々と気になつてね……」  
そう言つてたじたじな、ぎこちない答えが返つてきたのだ。この時点で僕の中二病セ  
ンサーには結構ビビつとききていた。

“こいつ間違いない。かつこいからシェイクスピア読んでやがる!!” っつね。  
分かる、分かるよ。その浪漫は。

周りの奴らがしようもない恋愛小説とか、漫画を読んでいる中で「シェイクスピア」を  
読んでいるっていうのは中々に格好いい。

僕も中二病患者として負けていられないと思ひ立って、その日の帰りに本屋に寄つて  
シェイクスピアの本を買つたからね。

そうして適当な静かなカフェにでも入つて、シェイクスピアを読む。ううむ……、かつ  
こい。これはかつこい。

その後、僕もシェイクスピアを読み始めたから色々と話す機会が増えたのだ。

元々クラスの中心人物的な奴だったから、全く話したことなかった訳でもなかったしね。

まあ気取ってる僕はあまり人に容易く話しかけない主義なんだが、教室でシェイクスピア談義とかかつこいいだろう？

結構シェイクスピアの名言ってかつこよくて、それについて話し合ってるだけでも僕の中二回路はもうぎゅんぎゅんだったね。

『外観というものは、一番ひどい偽りであるかもしれない。』

世間というものはいつも虚飾にあざむかれる』

シェイクスピアの名言の中でも中々に気に入っているフレーズだ。

けれどこういうフレーズについて感想なんて、普通の奴に聞いてもよく分かんないとか恥ずかしかつて無難な答えしか返ってこないだろう。

でも、あいつはきちんと自分の考えって奴を話してくれる。少しばかりのロマンを交えてね。

素直に言葉にしたことは無いが、あの瞬間は最近の一番の楽しみになってる。

おっと、少し話が逸れたね。

それでそいつと話すようになったのだが。

ちよつと気になることがあつたんで、色々を探りを入れるつもりで聞いてみたんだ。あいつ滅茶苦茶神話とか歴史に詳しいっぼいからね。

そしたらあいつギリシャ神話、日本神話、ケルト神話、インド神話、果てにはメソポタミア神話まで詳細に記憶してた。

それこそ有名な武器とか登場人物だけじゃない。例えばだけどヘラクレスの十二の試練とか天照の岩戸隠れなんかは歴史に詳しくれば多少の知識はあるかもしれない。

けれど普通ギリシャ神話のキルケーの魔女とかメソポタミア神話のイシユタルとかなんて知ってるかい？

この時点でほぼほぼ確信したね。絶対にこいつが中二病だつてね。

けれど僕は問い詰めるつもりはない。

本当なら初めて見つけた中二病仲間だから色々と話してみたいこととかあるんだけどもね。

中々の中二病患者の様だし、絶対に楽しい中二談議になるとは思うんだが。

でも、それでも僕はこの関係を壊すつもりはない。

それはこいつが“陰で世界を救つてる設定の中二病”だからだ！

ここ数か月くらい仲良くなってから彼と遊びに行つてるんだけど、彼にいきなり電話がかかってきて予定が入ることがよくあるのだ。



確かあいつはアルバイトとかしてはいないはずだし、ここ一年ほど忙しそうにしてるがそれ以前はそんな忙しそうにしていなかったはずだ。

実際にあいつと仲のいい友達にも確認したし間違いないはずである。

そもそもこの中学はバイト禁止だし、そんな中学生に友達との約束より優先するほどの予定が何度もいきなり入るはずもない。

つまり、これはそう！陰で世界を救う秘密結社所属設定なのだ！

各地で危険なモンスターだとか闇の組織だとかが現れたからその都度潰しにかかるとかそういう設定のあれである。

そうして世間を守るために日夜戦い抜いてるけども、誰にも知られず誰にも感謝されない。それでも世界の平穩の為に戦う知られざるヒーローなのだろう。

なんともありがちな設定だね。

全く、彼は本当に……。

そんなの滅茶苦茶好きに決まっているだろう!? そんな滅茶苦茶かつこいい設定なんて!?

いい。そのダークヒーロー感、とってもいい。

彼は一々僕の中二病センサーをこれでもかというほど刺激してくるから堪らないね。

ただ割と君と一緒に遊ぶのは楽しみにしてるんだから、回数はもう少し抑えて欲しい

んだけどね？

しかも度々遠い目をして、「平和っていいもんだな」みたいな雰囲気を出すのも忘れていない。

彼なら役者になれんじやないかと思うほど、その時の演技は様になつてゐる。知られざる戦いを思ひだしながら、ゆるやかに流れる時間を漫然と、けれどしつかりと噛み締める。あの雰囲気はそうとうなりきらないと出せないはずだ。

ふふ、彼の中二センスは僕と合つてゐるのか、彼と一緒にいるといつも心が躍つてしまふね。どんな世界を見せてくれるのか期待でドキドキが止まらない。

ん？そのドキドキはそういう事なんじやないのかつて？

……まあ気の合わない男と二人で何度も遊びになんて行かないさ。仮にもデートになるんだし、さ。

うん、じゃあ今日も少しばかり遊びに行くとしようか。

きちんとエスコートしてくれよ？

藤丸立夏君。

## 2話

土曜の朝、がやがやと混み合う駅のホームで僕は人を待っていた。

今日は立夏の奴と遊びに行く約束をしている。まあちよつと朝早く起きすぎて45分ほど早く着いちゃった訳なんだが。

道行く人はやはり目に付くのだろうか、僕の事をちらちらとみていく。エクステも派手な衣装も、秋葉原とかに行けば目立たないのかもしれないが、やはり普通の場所ではそれなりに目立ってしまうのだろう。

けれどそこら中にあるような没個性のつまらない服装を着るなんてさらさらごめんだ。

少しばかりあいつに引かれてないかは気になるところではあるんだけどね……。そうして十分ほど待っていると向こうから立夏の奴が走って来た。

ぱつと見ジャケットに目が行くけど、全体的におとなしめの落ち着いた服装だね。中々似合ってると思うし、割と好きなタイプではあるんだけどもジャケットとは思いつつたね？

中学生が着るにしてはとんでもなくハードルが高い気がするんだけども。いくら

テラージャケットとは言え、普通の中学生だと服に着られてる事になる。

けどなんでかかなり着慣れてるっぽい？

こういう所でも子供っぽい服が出てこないのはダークヒーロー的には結構ポイント高いよ。

ううん、僕のツボを外さないな君は。率直に言ってナイスだよ。

「ごめんね、待たせちゃった？」

「いや、僕が早く着きすぎただけさ。実際待ち合わせ時間の三十分も前なんだし気にすることは無いさ」

走り寄って来た立夏が申し訳なさそうに謝ってくる。

正直三十分前でも早すぎるくらいだ。

え、僕？その、ちよつと寝坊しない様にかなり余裕を持ってタイマーを仕掛けたら一発で起きれちゃってね……。

けど一切立夏には非なんてないのに、何度も謝罪の言葉を口にしてくる。

「だからそんなに気にすることは無いって言ってるじゃないか。全くイギリス人みたいなジェントルマンだね？」

「あはは、まあイギリスの騎士の家系の人からそういう事を叩き込まれたからね。だから今日は俺にエスコートさせてね」

そう言つて彼は手を差し出してくる。

ほほう、さりげなく自身の設定を出してくるじゃないか。

けど確かに立夏は学校でも女子の間でもジェントルマンな男子としてそこそこの話題だしな。気取つてる風にもなくさり気なく手を貸してくれるから結構評価も高い。

設定とはいえ、ここまで出来るとは中々本気じゃないか。

うん。だからちよつと男子と手を握るのは恥ずかしい所ではあるんだが、勇気を出して繋いでみる。

ぶつちやけ男子と手をつなぐ事なんて、学校のイベントとかそういうしたこと以外では初めてだ。うう、恥ずかしいな。

そうやって彼の差し出された手を握ってみると、彼の手はとてもごつごつしていた。大きな手がかつちりとした筋肉が覆つていて、何かスポーツでもやっているのか硬いタコが手に当たる。

ただ手を握つただけなのに、どうにも胸がドキドキする。

「君の手は、．．．とても硬いね。何かを掴むために努力した手だ」

「うん、まあ剣とか槍とか色々握つて特訓したからね。もしかして苦手だった？ごめんね」

「そんなことは無いさ！誰かを守るためなんだろう？だったら恥じることなんてない

さ。僕の好きな手さ」

少し申し訳なきようにする彼の手を両手でぎゅっと抱きしめる。

そうだと、こういう手が嫌いになんてなるはずもない。

しかし、こいつもしかしてだけど武術とか本格的に習ってるのかな？

手の甲にもタコがあるのが分かる。指の付け根、多分何かを殴り続けた時に出来るタコだと思う。

きちんと設定に近づくように努力しているのかな。そういう情熱は好きだぞ。

「そっか、ありがとうね。そう言ってくれると嬉しいな」

照れた様子で、立夏が頭を撫でる。

まあ努力をきちんと褒められるのは色々と恥ずかしいだろうけど、でもこういう中二的なノリが出来るなら仕方がない。

ダークヒーローは世間に認められずとも、それでもやはり真相を知って応援する人がいないと成り立たないからね。

「君の戦いに意味はあったんだ。だからきちんと誇るべきだよ」

「えっ!?!・・・飛鳥ちゃんもしかしてあの事を知ってるの?」

「いいや? 詳しい事はてんで知らないさ。ただ君が戦って来たことだけは知っている」

うん、どうやら滅茶苦茶驚かせてしまったらしい。まあ中二設定が他に知られるのは一般的には羞恥の極みみたいなものだろうからね。

でもここにもつと痛々しいのがある訳だし、ちよつとぐらい曝け出して同じ世界を共有してもいいんだぞ？

そんな思いを込めてちよつといたずらつぽく笑つてやると、とりあえずは納得したのだろうか、彼は一つ頷いて歩きだした。

「うん。そっか。とりあえず、ここにいても仕方ないし行こう。」

それでなんだけどいつになるかは分からないし、詳しい事は話せないかもしれないけれど、それでも色々々と聞いて欲しい話があるんだ」

「ふふ、構わないさ。きつととんでもなく楽しい話なんだろう？」

「勿論。滅茶苦茶面白い話が語り切れない程あつてね。でも中々話すことが出来なくてさ」

中二病患者というのは誰しも自身の設定を語りたいたいのものだ。例えば恥ずかしいものとして人に隠していたとしてもだ。

でなければいいなという妄想だけで終わらせて、ノートに設定を纏めたりもしなければ、コーヒーをわざわざこれ見よがしに飲んだりしない。

自分でも馬鹿で恥ずかしいと思うけど、けれどそれでも憧れてしまう。そういう奴だ

けが中二病になるのだから。

だから、僕だって同じ世界を共有してくれる君といるのが楽しいし、君の世界を見たいと思うのさ。

君の世界はどんな風に輝いているのか、どうか見せておくれ。

「ああ、とても楽しみに待ってるから。早く話しておくれよ」

☆

「あ、立夏。ここにだよ、ここに」

そうやって黒いシックな木材を基調として作られたカフェの前で立ち止まる。

落ち着いた色調の木の色と、明るい緑、そこに吹き抜けから光が降り注ぐネットでも

評価の高い読書カフェだ。

そう、立夏と会ってからシエイクスピアを読んで、ちよつと僕の中にかっこいい読書がブームなのだ。あくまでかっこいい読書であって、読書そのものはあまり興味がないんだけどもね。

「へー中々お洒落な場所だね。やっぱ飛鳥ってセンスいいよね。

俺もこういう場所大好きだよ」

「それは良かった。一人で来るにはちよつと敷居が高くてね・・・」

ぜひともこういう場所でかっこよく本を読みたかったんだけどもね。けどそこまで



読書が好きな訳じゃないミーハーな僕にはちよつと来づらくて……。

そのまま実際に中に入ってみると、予想よりもはるかに中二心に響く光景だった。ここで外書なんかを読めば間違いなく様になる。

かつこいい。これは絶対にかつこいい。

何の本を読むかも重要になってくるね。

ちらりと見た感じ、半分以上が海外の訳本なのかな？

うん、見たことないような作者ばつかだ。

とりあえず、アガサ・クリステイは聞いたことがあるからこれにしておこうか。『そして誰もいなくなった』とか中々かつこいいじゃないか。

「君はどんな本にしたんだい？僕はこの本にしたんだけど」

「あ、飛鳥も推理小説なんだね。俺も同じ推理小説だよ」

そう言つて彼の掲げた本の表紙は英語で書かれていた。

えーと、多分だけでもシャーロック・ホームズなのかな？

しかもそれ英語版だけでも読めるのかい？

「まあね。ちよつと一年ほど英語を使う必要があつてね。その時にある程度の読み書きとちよつと話せるくらいの英語を学んだんだよ」

「そんな英語得意だったのかい？」

「あはは、ここう見えてね。一応中間は英語100点だったんだよ?」

おお、それはすごい。

それに、海外の本を翻訳本ではなく、原本でそのまま読めるっていうのは中々にかっこいいじゃないか。うん、そういうのがあると英語を勉強する気になってくるね。

一緒に話す機会にもなるし、これから英語で分からないことがあつたら立夏に聞くとするか。

いや、案外ああいふ場所で読書するのも悪くないね。その後もアクセサリーとか見に行っただけども、でも読書の方が楽しかったかな。

何時間かの間ほとんど本を読んでいるだけだったけども、時間の流れ方がとても好きだ。本もまあまあ面白かったし。

うん、次も立夏を誘っていつてみるかな。

## 3 話

そろそろ期末試験が近づいてきた。

まあそこまで勉強が苦手な方ではないから、面倒だけでも適当に怒られない程度には勉強しようか。

正直いつもならもつと直前になって詰め込むタイプなんだけどね。

まあ今回はちよつとやってみたいことがあってね。

「なあ立夏。一緒に勉強会しないか？」

「ん？ いいよー」

迷った様子もなく、二つ返事で了承された。

立夏つて意外というか、文系教科が滅茶苦茶できるんだよね。国語、古文、英語、日本史、世界史。どれも中間試験でトップだったのだ。

まあその分理系はどうやら得意ではない様で、そこそこではあるのだが。

でも僕が理系と国語が得意教科、英語がもうすごい苦手教科なので、ここはぜひ立夏と教え合いつこしようと思いついたのだ。

そうすれば一緒に遊ぶことも出来るからね。

試験終わりにもお疲れ様の会でも開いて遊びにだつて行ける。

そのまま席に戻るととんとんと肩を叩かれる。

振り向くと、クラスメイトの子のキラキラした目がささる。

「ねえねえ、二宮さんつて藤丸君と仲いいよね」

「まあ、それなりにはね」

下手に否定すると余計大変なことになりそうだから、ほどほどに肯定しておこうか。うっ、目がすんごくきらきらしてる。確かこの子恋バナ大好きだったっけ。

ああ、てことは・・・。

「じゃあじゃあ、藤丸君と付き合ってるの？」

あー、やっぱりその質問が来たか。

さてはどうしようかな。あいつとも仲だつて良いし、そういう関係になるのを期待してないと言えようそになるんだけど・・・でもまだこつちから告白するつもりはないからなあ。

とは言つても最近立夏の奴、地味に女子の間で人気なのが気になる。

ううむ、下手に誰かがちよつかいをかけ始めるのも面倒だな。

しようがない。ちよつとばかり恥ずかしいけども・・・。口に人差し指を当てて、

しーつと息を吐く。

「まだ、だね。まだ。」

だからあまり言い触らさないでくれよ」

うん、こういう子にはこうしておけばいいだろう。

案の定、満面の笑みでぶんぶんと頷いている。この様子なら間違いないとそれとなく言い触らすだろうし、ある程度周りの女子への牽制にはなるか。

☆

放課後、立夏と二人で適当なファミレスにやって来た。

ドリンクバーを頼んで、数時間居座る学生特権のあれだ。

迷惑?・・・ごめん。

「うーん、お腹空いたなあ。飛鳥ちゃん何か軽く食べない?」

けど席に着くや否や、立夏がメニユー表を開いてしげしげと眺めだす。

確かに今日は体育があつたから多少は腹は減っているんだけど、しかし中学生の財布事情を考えると中々厳しいものがあるのだ。

特に僕はアクセサリーに結構金を使うせいで、金欠気味なところがあるし・・・。

「あはは、中学生が見栄を張るものじゃないかもしれないけども、飛鳥ちゃんの方も俺が払うよ」

「いやいや、それこそ余計に駄目だろ」

下手したら中学生のお小遣いの一か月分の大半が吹き飛ぶレベルじゃないか。

この後も色々と行きたいところがあるんだからそういう気遣いなんかはいらんわいって。

「いや、それが組織で働いてた時にすっごい大量の給料をもらっちゃってさ。本当にこれくらいなら奢ることの出来る余裕はあるんだよ」

いや、立夏アルバイトしてなかったって聞いてるんだけど。

結局その後僕の分まで奢るのはなんとかして止めてもらったけども……。

でも立夏の奴ガンガン頼むな。そんだけ頼んで、金とか夕食とか色々本当に大丈夫なのか？

まあ大丈夫というならそれを信じるけどさ。

ある程度メニューを注文した後でドリンクバーへと赴く。

とりあえずここはブラックコーヒーだな。

って、立夏もコーヒーマシンのブラックなのか。

これも中二病の性って奴だね。だってかっこいいから、仕方がない。

しかし席に着いた立夏は自然にコーヒーマシンの口を付けた。

えっ!?!立夏普通にブラック飲めるのかい?!

「まあ前まではそんなに好きじゃなかったんだけどね」

そう言うて立夏は苦笑するが、なんか謎の余裕が感じられてすごい腹が立つ言い方だ。

これは僕も負けていられないな。

コーヒーカーップを手に持つ。うん、どう見ても飲み物の色じゃない。

ふるふる震える手を、口元まで運ぶ。そのまま少しだけ口の中へと流し込む。

……やっぱり苦い。

コーヒーカーップを置いて新しいドリンクを取りに行く。口の中が苦みで得たいことになつてる。うん、やっぱりおいしくない。

「あはは、飛鳥はブラック飲めないんだね」

「いや、好んで飲まないだけさ。飲めない訳じゃない」

そう決して飲めない訳じゃないのだ。多少なら飲める……はずだ。

けれど、気持ちにはわかるよと立夏はうなずいてくる。

「まあ最初はまずいからね。とりあえずコーヒーもお酒も慣れだよ」

「ん？酒？」

「い、いやただの例えだよ。例え」

うん、まあそうだよな。僕もお酒は一回チャレンジしてみたいんだけど、さすがに法を犯すのは、ね。

年齢さえOKなら、ワインとかウイスキーとかかっこよく飲みたいんだが。

「とにかく俺も最初はコーヒー好きの奴に勧められて飲み始めたけども嫌いだったからね」

「そうなのかい?」

「うん。でもそいつがいなくなつてから何となく飲むようになってね。気が付いたらブラックじゃないと飲めない様になつちやつたんだよ」

なるほど、そういうストーリー設定はいいな。

僕も飲めるようになって、同じような事しよう。

☆

「うーん。疲れたあ」

あの後3時間程勉強してたんだが、そろそろ店も混んで来た。

これ以上は本当に迷惑になるからね。

店を出て、ゆつくりと家路に帰る。

初夏とはいえもう6時過ぎだ。空は夕焼けで真っ赤に染まっている。

カラスの鳴き声と僕らの歩く音だけが響く。

こういうのもいいね。

「ふふ、君とこうして夕焼けの中を歩くのは心が安らぐね。世界に僕と君しかいない



みたいに見えるよ」

「成程、確かに分かるかも。どこまでも広がってるはずの世界が、手の届く範囲しかないみたいだ」

「世界が無くなって僕たちだけ取り残された気分かい？」

「そうだね、もうこりこりだけど」

「こりこり？」

「いや、何でもないよ。」

「そうだ、良ければまた勉強会開かない？ 飛鳥ちゃん理系教科教えるの上手いしさ」

「ああ、勿論いいよ。こっちも英語を教えてもらえるのは非常に助かるからね」

「少しずつ家に近づいてくのが心惜しい。」

「うん、非日常と新しい物を求めていた僕が、この日々がずっと変わらずに続けばいいのになんて心から願う日々が来るなんて。」

「まだこの気持ちに名前は付けてないけれど、でもまあ多分そういうことなんだろうな。怖くて見ないふりをしてても、ずっとこのままでいることなんて出来ないし。」

「後は立夏がそういうった感情を抱いてくれているのを祈るしかないね。」

## 4話

期末試験も無事に上手く終わった。勉強会の成果もあつて結構良い点数も取れた。英語も過去最高得点だし、言うことなしだ。

とりあえず今日は放課後に勉強のお疲れ様会ということで、これから立夏と遊びに行く予定である。

今回は立夏の希望で、最近公開された映画を見に行くつもりだ。

たしか昔に公開された「300<スリーハンドレッド>」っていう映画の続編？リメイク？である。スパルタ人300人の戦士が戦う有名なあれだ。

今は映画が始まるまでもう少し時間があるので、適当な近場のカフェで時間を潰している。

「しかしほんと立夏は歴史が好きだな。半ば歴史オタクじゃないか」

「あはは、ちよつと否定できないかな……。色々話を聞いたりするのが楽しくてね」

「ふうん。歴史に詳しい人が、周囲にいたのかい？」

家族が歴史好きとかなのだろうか。まあ、確かに色々な歴史関係の雑学やうんちくは

聞いていて面白いジャンルではあるしね。

世界史の○○先生も、そういう雑学好きの先生で結構面白い雑談をしてくれるから生徒からも評判がいいし。

「うん、組織にいた人基本歴史に詳しい人ばかりだね。色んな国の人が居るから日本で聞くのとはちよつと違った話なんかも聞けるからね」

「へえ、それは面白そうだね。」

例えば何か面白い話とかないのかい？ちよつと気になってくるんだが」

「うーん、そうだね。ヴラド三世って知ってる？」

「いや、知らないな」

「じゃあ串刺し公っていうのは？吸血鬼のモデルになった人なんだけども」

「ああ、それならばちよつとだけ」

確か大きな槍で、敵を串刺しにして処刑した人だったか。

簡単にだけでも立夏が説明してくれた。

偉大なルーマニアの王であり、幾度のオスマン帝国との争いを勝利に導いた英雄でありながらも、しかし周囲からの恐怖と裏切りによりその生涯を終える。

さらにその死後でさえも、「吸血鬼ドラキュラ」という怪物に貶められた悲しき人物、か。

「成程なんともひどい話だ。守るべき民衆に呪われた無辜の怪物つて奴か」  
報われない人生だ。だからこそ逆に吸血鬼というイメージが広まったのかもしれないな。

日本でも道真公の例みたいに、絶望と憎悪の中で死を遂げた人間は化けて出ると考えられるんだろうな。死んでも死にきれないという、破滅的な執念を妄想してしまうのだろう。

しかし……。

「結局民衆つて奴は、恐ろしいものや違うもの、新しいものでさえ排除したがるんだろうな。」

それが自身にとって益になるかもしれないのに、何も考えずに異物感だけで排除しようとする」

「うん、もう少しだけ落ち着いて、もう少しだけ他人を理解しようとする世の中だったならいいんだろうけどね」

どこか悲しそうな表情で立夏が言葉を溢す。

そうだろうな、結局僕たちも理解されず排除される側の人間だ。中二なんてきつともが無意識的であれ、憧れていると思うのだ。

誰にだって、かっこいいと思えるものがあるはずである。

見た瞬間にどうしようもなくかつこ良さに心が震える。そんな体験をしたことがあるはずなのだ。

けれど、それを表現しようとすれば忽ち変な奴扱いである。

理解の出来ない奴だとして、無視され遠ざけられる。全く以て馬鹿馬鹿しい奴らだ。

「魔法に憧れた女の子がさ、誰にも否定されず微笑ましく見守られる。

そんな世界だったらいいなって思うんだ」

「むっ、別に僕は魔法には憧れていないぞ」

「あははは。ごめんごめん、別に飛鳥ちゃんの事じゃないよ。こつちの話だから。

おっと、ちよっと話がずれたね。

それでそのヴラド三世なんだけど。実は趣味が裁縫なんだよ」

「ふふっ、とてもかわいい趣味だな」

「うん、めっちゃゆるふわなアツプリケを縫ったりしてたんだよ」

なんだか想像するとすごいシユールな光景だな。

真祖の吸血鬼がアツプリケ大好きとかファンタジーだとまずない設定だろう。逆に

嫌いじゃないけども。

「他にもマルタっていう女の子がいるんだけどね。

聖書に出てくる人でキリストに会って家に招いたり、暴虐の竜を鎮めた人として有名

な聖人なんだけども」

ふむ、話を聞いている限りでは中々中二病ポイントは高そうだけども。

祈りの聖女って奴なのかな。え、ドラゴンを鎖で引き連れてる逸話もある？

町の中をドラゴンに乗って進む聖女とかすごいかつこいじやないか。

聖書も結構やるもんだ。いや、ロンギヌスの槍とか聖杯とか考えると元々か。

「うん、でもそのマルタさん。実はドラゴンを拳で殴つていう事を聞かせたつていう話もあるんだよ」

一体なんでそんな逸話が残ってるんだ聖女様・・・。

いきなりすごいイケメンな聖女のイメージになつたんだが。

「なんなら喧嘩っ早いヤンキー説まである」

「聖女様がヤンキー」

「うん、ヤンキー」

だから一体なんでそんな逸話が残ってるんだ聖女様。

実はヴラド三世と同じく、誰かがネガキャンでもしてるのか？ううん、可哀想な聖女様だ。そんな印象を付けられるなんて。

でもやっぱりこういう小ネタは面白いね。立夏もこんな風に歴史オタになつたんだろうか。

「あつ、飛鳥ちゃん。そろそろ映画が上映するから行かないと」

立夏の言葉を聞いてちらりと時計を見るとそろそろ良い時間だった。

やはり立夏と話すのは楽しくて時間が過ぎるのが早いな。40分近くは話していたはずなのに、一瞬にしか感じなかった。

「おっと、もうこんな時間か。じゃあぼちぼち向かおうか。

そうだ、スパルタ王に関しては何かないのかい？」

「えー、そうだなー。じゃあスパルタ王の苦手な物とか・・・」

☆

「それじゃあ飛鳥ちゃん、またね」

「ああ、また明日」

立夏と簡単な挨拶をして別れる。

映画を見終わったらもういい時間だったので、そのまま帰ることにしたのだ。さすがにまだ中学生だから、暗くなってくると帰らないと怒られるからね。

ちなみに映画は立夏的には大満足だったようだ。

僕の中二病的な好みとは少し合わなかったけどね。ひたすらに筋肉！筋肉！筋肉！な映画だったし。なんていうか男の子が好きそうな映画かな。

映画自体は結構ストーリーも演出も良くて、普通に面白いと思うが。

ま、それでも立夏と見に行けたし、大満足つてことでいいか。 いや少しばかり乙女チックすぎるかな？

そんな人に語るには少しばかり恥ずかしい事を考えながら、次に立夏と遊びに行く日を考える。

夏休みにプールに行く約束を結んできたのだ。結構誘うのは緊張したけども、けど無事になんとか誘うことが出来た。

その内水着も買いに行かないとな・・・。

そうして歩いていると突然声を掛けられた。

そちらの方を振り向くと、スーツを着た超大柄な男性が立っていた。

恐らく190cm代の身長、鍛え抜かれた体、人を殺したことがあるような目。さっきの映画から出てきたのかと思うほどの男性がそこにはいた。

そ、そういうお仕事の人なのだろうか？

どうしたらいいんだ!? 立夏助けに来てくれ!!

「あの、いきなりで申し訳ないのですがアイドルに興味はありませんか？」



## 5話

古文の先生の話を聞き流しながら、先日貰った紙を眺める。

武内さん、346プロダクションのプロデューサーの方から貰った者だ。どうみても堅気の人には見えなかったが、あれでアイドルのプロデューサーらしい。

しかし、アイドルか……。正直に言ってしまうと、僕はアイドルそのものにそこまでの憧れは持っていない。普通の女子なんかは憧れるんだろうけども、生憎僕は少しばかり普通とは違うからね。

そういった意味ではあまりアイドルになる気はない。ただ、なんとなく面白そうだと感じるのだ。

多分そこには僕の知らない世界が広がっているんだと思う。それをちよつとだけ覗いてみたいという思いがある。

かと言って、周りの女子に相談すればやかみを買いかねないし……。ここはあいつに相談するしかないか。

とりあえず昼休み、ちよつとだけ立夏の奴を呼び出した。

「実はちよつと相談があつてね、立夏。こんな誘いを受けてしまった」

「おお、アイドルなんてすごいじゃん。

飛鳥ちゃんならかわいいから絶対に人気出るよ」

「・・・あ、ありがとう」

相変わらずこいつはド直球ストレートで褒めて来るな。そういう事を人の目を見て言うのは少し反則だぞ。

でも他の人に人気になってほしくないな位は言つてもいいんだぞ？

後ろの席の子が良く読んでる様なベツタバタな恋愛漫画みたいだけど。

「でもやっぱり色々と不安だね」

「うん、知らない事をするってやっぱりそうだよね。

けど俺はやってみるのが良いと思うよ。前にいた組織もアルバイト感覚で入ったけど、とても楽しかったし」

「アルバイト感覚なのか」

「うん、駅前のポスター見て応募したら、そのまま通っちゃって」

それでいいのか、秘密結社。それで本当にいいのか、藤丸立夏。

いや、気を使つてくれてるのは分かるんだが、けどその設定はどうなんだ？

「俺の場合は途中で辞めることが出来なかつたけど、アイドルなら合わないなら辞め

たらいいんだし」

「まあ確かにそれはそうだね」

迷ったらやってみる。身もふたもないが、結局やらなければ始まらないのは確かなことなのだ。

うん、ここで尻込みするのは僕のキャラじゃないね。せつかく未知の世界が向こうからやって来たんだ。勇気を出して飛び込んでみるか。

☆

「最近どんな感じ?」

僕がアイドル候補になって一週間ほどが経った。

既に夏休み数日前だから、今日は半日で終わりだ。夏の1時過ぎ、じりじりと照り付けるような日差しの中立夏と歩いて帰る。

特にアイドル関係の事を話したくてね。基本的に学校で話をしてるのは、立夏と担任の二人しかいないからね。

別に周囲に話しても、騒ぎになるだけだし。一応努力はするが、そこまで売れるとも思っていない。

「んー、まだまだ簡単なレッスンしかしてないさ。」

「どんだけ歌えたり踊れたりするのかの確認するくらいかな」

「ふうん、でも飛鳥ちゃんどっちも得意そうだね」

「はは、まあ素人レベルでしかないよ」

運動神経が悪い方ではないと思うけれども、そもそもダンス自体したことないからね。歌だって、滅茶苦茶得意ってわけでもない。

まあ思いつきがいいというか、恥ずかしさが無いのは褒められたけども。人前にかっこつけてキレッキレのポーズをするなんて、僕がいつもやっていることだからね。

「・・・うん、とりあえず歌を聞いて気絶しなければ大丈夫だって」

「いや、そこまでひどくはないからな！

っていうか、前にクラスでカラオケ行ったときに僕の歌を聞いていただろ!？」

「確かに。飛鳥ちゃんがそういうのに参加するのは結構意外だったんだけども」

「ああ、まあたまには良いかと思ってね・・・」

半分以上は立夏と遊びに行くのと、それと何より周りの女子への牽制が目的だったんが。

幸いある程度女子が察してくれて、僕は普通に立夏の居る方へ入れてもらえたからね。少なくとも狙っている子はまだいないと見ても良いだろう。

「でも、夏休みはみっちりレッスンをやるらしいからね。

夏休み明けには多分そこそこマシになつてはるはずさ」

「そっか。大変だね。」

俺も夏休みちよつと海外に行くことになってね」

「え、海外!?!どこに行くのさ」

「ちよつとイギリスのロンドンに、ね。」

だから来週プールに行った後はちよつと会えなさそうだね」

「ああ、お互いに有意義な夏休みを送ろうじゃないか」

しかしロンドン旅行とはすごいな。

ぜひ僕も行ってみたいものだ。絶対にかっこいいしな。

☆

「おはようございます、飛鳥ちゃん」

「ああ、おはよう、文香さん」

夏休みが始まって、一週間程経った。そこそこ本格的なレッスンが始まったところだ。

今はちよつどレッスン終わりで少し休憩していると、文香さんから声を掛けられた。既にそこそこ大きなステージも任されている、最近注目のアイドルの方だ。

どうやら読書が好きらしく、この前346プロでシェイクスピアの本を読んでいたらしい。声を掛けられた。なんていうかこの人は基本暇さえあれば本を読んでいる。

加えて所謂乱読家と呼ばれる人種の様なので、色んなジャンルの本を大量に読むらしいのだが、どうやら洋書を読む人が少ないのを気にしていたらしい。

少し古い本になれば有名な物でも読んでる人はほとんどいないからね。それでたまシエクスピアを読んでいる僕を見かけて気になって声をかけてきたらしい。

まあ文香さん程読書が好きないから、そんなに種類を読んでる訳じゃないんだけどね。

けどそれでも大好きな本について話が出るのが嬉しかったようで、よく話しかけられる。

「そういえば明後日に遊びに行くんですよね？いつもの彼と」

「うん、○○プールに行くつもりだよ」

「なるほど、飛鳥ちゃん達の住所ならそこが一番近いですもんね」

文香さんには立夏のことは話してある。というか、色々と文香さんと話す時に、立夏からの受け売りの話をしていたらすごく受けてね。

友達の受け売りだって話したら、根掘り葉掘り聞かれてしまった。どうやら立夏の事も結構気になってるらしいけども、こんな綺麗なお姉さんを絶対に合わせるつもりはない。

「ねえ、出来たらデートに行った後話を聞いてもいいですか？」

文香が首を傾げる。まあ僕も年上の女の人に相談できるのは嬉しいんだけど……ただなあ……。

「ふうん、文香が恋愛事に興味示すなんて珍しいけどもどうしたの？」  
僕がちよつと迷っていると、横から声を掛けられた。長い茶髪の大学生くらいの女の  
人だ。

この人は、確か文香さんと同じグループの人だったはず。よく文香さんと一緒にいるのを見るし。

ただ名前までは知らないの、少し僕が困っていると女の人はこちらを向いて自己紹介してくれた。新田さんと言うらしい。

けれど新田さんがちよつと僕の聞きたいことを聞いてくれたのは有難い。あまり文香さんは恋愛に興味なさそうな人だからね。なんでこんなに食いつくのかはとても気になる。

「いや、その飛鳥ちゃんが読書カフェとか図書館でデートしたっていうのがすごく羨ましくて……。」

それで私もちよつと気になってきまして。参考にしようかな、と」  
そう言つて文香さんは本で顔を隠す。なんだこのあざとさは。なんだこのかわいさは。

別にこんな風な女性になりたいとは思わないが、かわいい大人のお姉さんは反則だろう。

「……立夏には手を出さないで下さいよ」

割とマジで勝てる気がしないので。

落ち着いた美人な大人のお姉さんとか、男の妄想そのものじゃないか。こんな男子中学生には凶器でしかない。

ゆつたりと服を着てるけども、レッスンの時にTシャツ姿の文香さんの胸すごく大きいし。

「そ、そんなことしませんから!」

文香さんが真っ赤になって否定する。ちよつと不安だなあ。

ただそれを新田さんが面白そうな顔で眺めているのが印象的だった。

「ふふつ、ねえ二宮さん。私もお話を聞いてもいいかしら」

「ええ、構いませんよ。むしろお願いします」

会ったばかりだが、ぜびとも新田さんには聞いて欲しい。

何せこの新田さんから感じられる圧倒的な恋愛強者感。強い。絶対に強い。アドバイスを貰えるのはとても心強い。

「よし、この戦い勝ったな」



## 6 話

前日、立夏とプールに遊びに行ってきた。

その事について、オフィスの敷地内にある346カフェで新田先生と文香さんに連絡と相談をしに来たのだ。

「それで飛鳥ちゃんどうだった？楽しかったかしら？」

「ああ、とても楽しかったよ」

新田先生からの質問に、頷いて返す。

え？なんで新田先生なのかって？

いや、この人から立ち上る恋愛力が分からないのかい？自称恋愛強者なんかとは比較にならない程の真の恋愛強者感オーラ。

男心を知り尽くしたうえで、女子を敵に回すことなく、男からの評価を上げる術を知っているタイプだ。しかも男心を理解しながら、計算せずに素で最善を実行できるタイプでもある。

間違いない、恋愛における最強格だ。

先生呼びもせざるを得ない。

「そう、それは良かった。」

で、水着はどうだったの？」

わざわざお二人にも選ぶのを協力していただいた水着だ。いや、まあ文香さんは顔真っ赤にしてあわあわしてるだけで、基本新田さんのアドバイスを聞くだけだったような気がするけども。

それで新田さんおすすめの水着の中から、僕の好みの物を選んだわけなんだが。

「うーん、どうなんだろうね……。色々と確かに褒めてくれはしたけども、新田さんの言ってた程の反応は無かったかな」

「へえ、そうなの？ 飛鳥ちゃん程かわいい女の子の水着姿なんて、男子中学生なら絶対に気になると思うんだけど」

「でもいつもと同じ様な態度だったんだが……」

やっぱり胸か、胸なのか？」

「ふふっ、きつと恥ずかしいからいつもと同じように振舞ってるだけね。」

それに胸に関しても、年齢を考えれば十分に平均以上はあるから大丈夫よ。まあここにいる子はやっぱりそこそこ大きい子が多いからちよつと不安になるのも分かるけどもね」

大きい胸か……。

346プロですぐさま仲良くなった子の事を思い出す。

神崎蘭子、同じ中二仲間の子なんだが、こいつ中学生の癖にでかい。服の上からでも分かるくらいでかい。

あれで同じ年っていうんだから世界は理不尽だ。

確かにクラスと同級生と比べてそこまで小さい訳じゃないが、やっぱり気になる。

それと立夏のあの反応は照れ隠し、なんだろうか？

新田さんは心配ないって言ってたけども、どうにも立夏の反応が気になる。

なんだろうな、この感覚。妙に慣れてるって感じか？

僕の水着がどうこうって感じじゃないのが、すごく引つ掛かる。

いやまあ、多分僕の勘違いだとは思うんだが。

後、そこまで露出の多い水着じゃあないとはいえ、新しい水着を着るのはそれなりに恥ずかしいんだから、もうちよつといい反応してくれてもいいじゃないかと思う。

☆

その後も色々根掘り葉掘り新田さんに昨日のことを聞かれた。

え？文香さん？うん、なんか首を振るだけの機械になつてたかな。

「ふうん、ねえ飛鳥ちゃん、立夏君の写真とかつてある？」

「一応はあるけれども……」

ある程度話を聞き終わつた新田さんが、何かを考える様に顎に手を当てる。とりあえずこの前行つたカラオケの写真を見せる。

「ええと、この僕の左にいる奴が立夏かな」

「うんうん……」

「へえ、結構かつこいいですね」

新田先生は写真を見て、さらに頷き始める。

まあ、芸能人なんかを見慣れている二人にしてみればあれだろうが、普通にかつこい範疇ではあるんじゃないかな。クラスの女子でもなんかそういう認識はあるし。

後だから文香さん、その反応はちよつと不安なんですけども。

「……立夏君つて勉強も運動もできるのよね？」

「まあどつちも学年トップクラスですね」

「話聞いている限り結構気遣いも出来るのかな？」

「ええ、割とさりげない気遣いはしてくれませよ」

「多分だけでもあまりがつつかないわよね？」

「そうですね、ガツガツはしてないです」

どんどんと断言してくる新田先生に答えて行くと、先生は困つたという顔をす

る。

そうなんだよ。それにすごく困ってるんだよ。

「立夏君、これで中学生だったら絶対にモテるわよね？」

「うん、そうなんだよ。まだ周りからは話題になってる程度だからいいんだけど」

「確かに、普通の男子中学生に比べたらすごく好印象ですよね」

新田先生の推理に全力で同意する。文香さんも同意の様だ。

半ば猿みたいな男子の中で、立夏だけすごい落ち着いてるんだよな。なんていうか男子特有の厭らしさが無い。

それで優しくて人付き合いだって良い。うん、どう考えても人気株だ。

「んー、でも飛鳥ちゃん的にはまだ告白するつもりはないのよね？」

「……まあ、そうだね」

正直なところ、恋愛感情って意味で好きと言えるかは自信が無い。気になってるくらいの関係だ。

ただ立夏とは趣味も合うし、気だって合う。別に気になるような点も無いし、むしろ好印象の塊だ。

……うん、これでそういう気がないなら彼氏の存在に興味が無いってレベルだろ。周りの女子程、きゃいきゃいとしたりした恋愛をする気はないけども、僕にだってちよつと

くらいの興味はあるんだ。

と言つても、まだ告白する程の気はないんだけどね。

それに一応向こうの方から告白してもらいたいっていう気持ち位はあるんだ。多少乙女チックだけでも、別にいいじゃないか。

「けど、プールに二人で遊びに行くような関係なら大丈夫だと思ふんですけどもね」  
文香さんがぼそりと呟くように言う。うん、まあいい関係であると思ふんだけど。  
たまに立夏からも遊びに誘ってくれるし。

「そうね、あまり心配はしないでいいと思ふわ。

一応文化祭とかで狙う子が出ないか位は注意しておいた方がいいかもしれないけれど」

な、成程さすがは新田先生だ。文化祭の事は考えていなかったが、確かに狙う子が出てくるかもしれない。

ちよつと注意しておかないといけないか。

「でも、焦らないでね、飛鳥ちゃん。

多分仲良く立夏君といれば自然とそういう関係になると思ふわ。

応援してるから頑張つてね、飛鳥ちゃん」

「私も応援してますから」

新田さん達はそう言ってフアイトのポーズをする。

勿論だとも、任せておくれ。

「争いごとに負けるつもりはないさ。アイドルも恋もね。

生憎苦い敗北の味は苦手なのさ」

☆

.....。

.....。

いぎりすにいったりつかから、めっせーじがきたんだが。

いろいろとろんどんをたのしんでるようでありとおもいます。

ところで、なんだが。りつかさん、ずいぶんうれしそうにましゆさんとのことをかい

てるけども.....。

ましゆってだれだ？

このしゃしんにうつつてる、かためおっぱいちゃんか？

え？

.....え？

## 7話

夏休み明けの朝、学校にやってくる奴の空気は綺麗なまでに二分していた。

宿題もきちんとやっただけであるし（あるいは完全なまでに諦めているか）、友達と会えるのが嬉しいので楽しそうにしゃべっている奴。そして、まともに宿題をやっていないだろうのか、必死になつて机に向かうか、あるいは絶望に暮れてテンションダダ下がりな奴。等しく皆に訪れたはずの幸福は、しかしこうまでにも悲しい差を付けてしまったのだ。

ちなみに僕は宿題はきちんと終わらせてある。基本的には事務所で宿題するアイドルの子が多いからね、そうなるとまあ自分もやっておこうかという気になる。

346プロからは宿題は出来るだけやっておくように言われているから割と皆真面目にやっただけ。内申点は取っておいた方が良くという事らしい。それでもしない奴はしないらしいけど。

まあでも僕がこのクラスにおいて、前者に属しているかというところでもない。

目下、僕には喫緊に対処しなければいけない問題があるのだ。学業も、アイドル活動も割と上手く行っていたのに、まさかこんなアクシデントがあるなんて……。



非常にゆゆしき事態である。

・・・・なあ立夏。

あのおっぱいで後輩は駄目だろ!?

あ、違った。

あの後輩おっぱいちゃん是谁なんだ!?! どうやら滅茶苦茶仲が良さそうなんだけど？

あの子とは、その付き合っているのだろうか。遠距離恋愛か？

いやでも一切そういう話を聞いたことが無いし、それなら彼女だつて紹介するよな。

けど、それにしても随分仲が良さそうだよな・・・。付き合っていないにしても、やっぱりそういう感じなんだろうか？

つらつらとそんなことを考えていると、どうやら立夏が登校して来たようだった。

皆にイギリス土産のお菓子を配っているらしい。

「おはよう、飛鳥ちゃん。これお土産のお菓子」

「ああ、おはよう。ありがたく貰うよ」

そう言つて、カラフルな紙に包まれたチョコレートを貰う。すごい甘い匂いがぶんぶん漂ってくる。

とりあえずその場で食べてみるが、うん海外の味だな。とにかく甘ったるい。嫌い

じやないけども。

ただ、それよりも僕的には気になることがあった。後輩ちゃんの事とは別に、だ。

「それで、立夏その右手どうしたんだい？」

包帯を巻いた立夏の右手を刺す。簡単にだが手の甲と手のひらを覆うように巻かれている。

指と手首までは巻かれていないから、自由に動かすことは出来るだろうが。

「え、ああ。これはちよつと怪我しちゃつて」

あつ、ふーん（察し）。

どこか戸惑いがちな立夏の言葉を聞いて、確信する。こいつ怪我なんてしていないな。間違いない。

そうか、君もついに目覚めてしまったのか。

厨二病の僕には分かる。いや、全世界の中二病患者が理解するに違いない。

ある意味古典的ともいえるべきだろうか、中二病の代表格、邪気眼に違いない!!

きつと立夏の右腕にも何かすごくてやばいのが宿ってしまったのだろう。

僕も帰りに包帯を買いに行かなければならないな、これは。

「そういう事か。僕は理解しているさ、見られたら不味いんだろう?」

「あははは、うん、まあね」

立夏はそう言つて苦笑する。

ふつ、安心したまえ立夏。明日になれば僕も同じように邪気眼に目覚めているさ。君だけが選ばれしものだなんて決まつてるわけじゃないんだぜ？

☆

マシユさんの事聞き忘れた・・・。

邪気眼の事で、すっかり頭から出て行つてしまった。とりあえず今日は半日で終わりなので、立夏を捕まえる。

予定も無いらしく、二つ返事で遊びに行くことになった。とりあえず適当なカフェに入るか。聞きたださないといけないこともあるし。

そうして席については良い物の、僕が何かを話す前に立夏がカバンをあさり始めた。

「ちようど良かった。飛鳥ちゃんに朝の奴とは別にお土産があつてね。

ふふ、中々良いものなんだよ」

そう言つて紙の袋を渡される。中に入っていたのは、金属製のブレスレットか。

ふうん、装飾自体は控えめだけど、全体のデザインはかなりかつこいいね。

「へえ、中々かつこいいじゃないか。ありがとう、立夏」

「実はそれちよつとした呪文をかけてもらつてあるんだ」

「呪文？」

「そう、幸運の御呪い。身に着けると良いことが起きるんだって」

ブレスレットを掲げてしげしげと眺める。店の照明をよく反射して光る。

何かのコーティングでもしているのか、ブレスレットは奇妙な色合いをしていて、何かの力を秘めているかのように思えた。

様々な色が現れるから虹色と称するのが正しいのだろうが、それが真つ赤に燃える夕焼けの様に、あるいは澄んだ夏の青空の様に表情を変えるのは見ていて飽きない。

確かに、幸運の一つでもひよっこり訪れてくれるかもしれない。

「うん、どうかな、似合うかい？」

とりあえず右手に填めてみる。大きさも僕の手には大体あっているね。

派手過ぎず、可愛すぎずでちょうどいい塩梅のアクセサリーだ。

「滅茶苦茶似合ってるよ、やっぱ飛鳥ちゃんはかっこいいのが似合うね」

「ふっ、そんな褒めないでくれ。けど本当にありがとう、立夏。大切にさせてもらうよ。」

それで、イギリスはどうだったんだ？楽しんで来たようだったけども」

それで、本題だ。可及的速やかに解決せねばならない問題である。

とは言っても、いきなり問い詰めるのはさすがに、ね。やっぱり色々と恥ずかしいものがある。

ここはとりあえずイギリス旅行の話題から攻めていく事にする。まあイギリス旅行のものにも興味があるのは事実だし。

どうやらイギリスで立夏は色々写真撮ってきたようで、スマホを見せながら説明してくれる。日本とは違った、レンガ造りの古い町並みはやっぱり様になる。

普通に街角にあるカフェも、大きな河口にある港町も、そして大きな時計塔もどれも異国情緒溢れていた。どこか懐古主義的な、中世の匂いをそのまま残した町は単純に言つてかつこいい物だ。

立夏の楽しい気な説明を聞くだけでも、羊皮紙の古錆びた懐かしい匂いとパンの素朴で香ばしい匂いが思い起こされる。

勿論、それだけではなくコンクリートで包まれたビル街の写真もあった。

こういう写真も日本とは少し趣が違って、それはそれで面白かったのだが、けれど僕の興味を引いたのはやはりレンガ造りの町であった。何故生まれ育った町とは似ても似つかないのに、こうも懐かしさとかつこよさを感じるのだろうか。

ああ、ぜひとも僕もこういう旅を試みたいと言う思いが湧いてくる。なんとも羨ましい限りであった。

そうして話を聞いている内に、ピンクの髪少女が写真に現れた。

非常に嬉しそうな顔で、立夏と写真を撮っている。ただ、その写真に写っている顔を見た時に悟ってしまった。きつと僕よりもずっと儂くて、たおやかで、いじらしくて、けれど世界の全てが色づいて見える様な、そんな恋をしていた。

ああ、自分の気持ちに答えすら付けていない自分がちよつかいを出すのが憚れるほどに、楽しそうな顔をしていた。

だからだろうか、なんとなく彼女が付き合っているのならそれでいいのかも知れないと思つた。すんと落ちるかのように、それならそれでいいかと納得してしまつたのだ。

「この子がマシユって子なんだよね？随分仲が良さそうだけでももしかして彼女なのかい？」

「恥ずかしくて言えなかつた言葉がするりと口をついて出てくる。」

でもまあマシユさんとはお似合いだと思う。ああ、結構気になつてたんだけども。分だけ一週間くらいは引き摺りそうだね。

ただそんな僕の心境とは別に、立夏はどこか意外そうな顔をして返す。

「いや、マシユとは付き合つてないよ？よく言われるんだけど。」

確かに大切な後輩だけれども、なんていうか妹みたいな感じだね。あんまりそういう目で見れないんだよ」

ぼりぼりと頬を搔きながら立夏が答える。ただどこか困った様子であっても、そこに気まずさという物を感じることは無かった。

それでなんとなくだが、さっきの写真が思い浮かんだ。それと同時にきつと彼女は告白していないんだなと悟った。

あの恋は、きつと今もまだ彼女の胸の中に秘められているのだ。他人が見れば目を覆いたくなるほどに隠し通せていないけれども、それでも彼女はあの思いを大事に抱えているに違いない。

そして、立夏はきつとそれに気付いていないのだ。もう隠す気なんてないだろうと言いたくなるぐらいの笑顔なのに、どれ程の鈍感なのだと言いたい。

けれど、正直に言えば良かった。僕にもまだまだチャンスはあるってことだ。

「へえ、そうなのか。いや、すごく仲が良さそうだったからね」

「あはは、うん。仲はとてもいいよ」

僕の言葉を嬉しそうに立夏は肯定する。それにちよつとした不満を感じないでもないんだが……。ただやっぱり立夏にそういう色は無さそうだった。

本当にただの仲の良い後輩と思っっているんだらうな、恐らくは。

いきなり降ってわいた問題だが、最悪の事態ではなさそうだった。いや、強敵が現れたわけだが勝負が終わっているよりかはマシだ。

ただこれだけ綺麗な恋をしている子がいるのに、それを邪魔することになるのは少し気が引けるんだが……。

結局は早くにこの気持ちを整理しないとイケないのだ。宙ぶらりんなままに、放っておくのは良くなさそうだ。

☆

とりあえず喫緊の問題は解決したので、後は立夏と雑談を楽しんでいたんだ。

色々とまだイギリス旅行の話題はあつたし、僕の方もアイドル関係の事で話したいこともそれなりにはあつたからね。

だから二人で結構な時間は話していたと思う。恐らく1時間半くらいは余裕で経っていたはずだ。

それでぐーたらと話していると、立夏に電話が掛つて来たんだ。何かあつたのか真剣な顔立ちになるから少し心配だね。

どうやら用事が出来たらしくて、今日はここで開きつていうことになった。それでそのまま会計を済まして店を出ただけだね？

・・・立夏の迎えらしい車がすごい高そうな外車なんだけど。しかもめっちゃイケメンな外国人の人達が、スーツを着て車の前で待ってるのだ。

え？本当にその車で会ってるんだよな、立夏？なんか普通に車の方向に向かって歩い



てるけども。

「ふむ、どうやらお邪魔してしまったようですね。すみません、立夏さん、お嬢さん」  
そう言つて一人の金髪の人が頭を下げる。すぐくそれが様になっている。動き自体も優雅だし、高い身長と鍛えられた体がすごくスーツに似合っているのだ。

「いや、気にしなくてもいいよ。多分だけでもまた事件なんだろう?」

「ええ、その通りです。ですので、少しばかり立夏さんをお借りします」

「必要なことなんだろう? 仕方がないさ。」

「・・・それで立夏」

「うん」

「また君は戦うのかい?」

「・・・勿論だよ」

真剣な顔で立夏が頷く。ふふつ、中々いい演技だ。なんでこんな大掛かりなのかは知らないが、中々かつこいい演出じゃないか。

じつと立夏の目を見つめる。向こうも何も言わない。何かを目で語り合ってる感じの時間が流れる。

そして少しして、目線を外しながら肩をすくめる。

「うん、まあ君はそういう奴だよな。」

それじゃあ頼んだよ、ヒーロー」

「いや、俺はヒーローなんかじゃないよ。

皆の力を借りてるだけなんだから」

「いいや、ヒーローだよ。例え誰も知らなくても、誰も認めなくても僕だけはきちんと君のことを称えるさ。だからきちんと胸を張り給え」

「おう、良いこと言うじゃないかお嬢ちゃん。

マスターも謙虚なのは良い事だが、度を超すのはよくねえぜ。お前さんは紛れもなくヒーローさ。俺も認めてやる」

青髪の、これまたイケメンのお兄さんが立夏の肩を叩く。ちなみに当然の如く長身かつ筋肉ムキムキでもある。すごいな。

後滅茶苦茶いい笑顔でニヤリとされたので、こちらもニヒルな笑みを返す。

「だから、頑張ってくれよ。僕のヒーロー」

「・・・うん、ありがとう。そして了解！」

立夏が手を上げるので、パーンとひとつハイタッチする。

そのまま腕を組んで、立夏が出発するのを眺めていた。車が去っても数分間の間突っ立っていた。

ふふふ・・・この圧倒的中ニパワー。うん、なんかすごい満足感だ！